

第58期（2008年4月期）日本語研修コース

鹿 島 央

今年度4月期の大使館推薦の研究留学生は、文系部局12名、理系部局12名で、これまでのように日本語学習歴に幅があった。前期、後期の研究留学生配置人数には差があり、前期は3～4倍程度多くなっている。今期初めて受け入れる私立大学が1校あった。

1. 研修生

A. 大使館推薦（研究留学生）

文部科学省より配置された大使館推薦の国費研究留学生は、16ヶ国24名（ブラジル4名、ミャンマー3名、インド、インドネシア、フィリピン各2名、アルジェリア、イスラエル、カンボジア、グアテマラ、トルクメニスタン、ドミニカ、ハンガリー、ホンジュラス、モンゴル、ナミビア、南アフリカ各1名）で、進学先は名古屋大学21名、愛知学院大学2名、名城大学1名であった。今回、24名のうち6名は全学向けの日本語講座を受講した。内訳は、IJ211（全学集中日本語中級前半）5名、IJ112（全学集中日本語初級後半）1名であった。ただし、イスラエルの学生は、一身上の都合により授業開始直後に帰国したため、一時研修生休止の措置をとったが、その後辞退となった。

B. 学内公募（大学推薦国費留学生）

今回は応募はなかった。

以上のように、第58期は研究留学生24名、うち17名が日本語研修コース、残り6名は全学向け日本語講座を受講した。1名は辞退となった。

2. クラス編成

授業は、2クラス編成とし、専任教員2名、非常勤講師10名の計12名が担当した。今期の17名の中には、来日前に多少の学習を行っているものが8名いたが、最初の1週間のスケジュール以外は、他の初級レベルの学生と同じカリキュラムで授業を行なった。

3. 時間割と日程

授業はこれまでのように月曜日から金曜日まで、午前8時45分から午後2時30分まで90分授業を3コマ行った。

コースの日程は以下の通りである。

4月10日(木) 開講式、4月11日(金) 授業開始、夏季休業7月24日～8月31日、9月1日(金) 授業再開、9月9日(火) 修了式。

見学旅行は、9月8日(月)にバスで白川郷を訪ねた。

4. カリキュラム

カリキュラムは、これまでと同様に(1)主教材 *A Course in Modern Japanese [Revised Edition], Vols. 1 & 2* (名古屋大学日本語教育研究グループ編) を中心とする授業、(2)その他の活動（ホームビジット、自分について話す、書く活動など）(3)専門について話す、の3つで構成した。新しい試みとして2冊目の第11課以降に、各課で「Talking time」の時間を設定し、テーマを決めて自由に話す時間とした。また、WebCMJのクラスですべて終了しなかった学生のため、週一回4限目を補習の時間とした。

以下に、概要について報告する。

(a) 教科書を中心とする授業（1～14週）

昨年度と同様、夏休み前に主教材である *A Course in Modern Japanese, Vols. 1 & 2* が終了するようなカリキュラムとし、最終テスト、テストチェックを行い、9月に行う専門発表のオリエンテーションを行った。

- ・ Drill（各課の文法練習）
- ・ Dialogue（会話）
- ・ Discourse Practice & Activity
会話の運用練習として各課の Discourse Practice にもとづくロールプレイなど口頭練習を行った。
- ・ Aural Comprehension
- ・ Reading Comprehension

(b) その他の活動

・話す練習

先期と同じテーマ（「たのしかったこと」「趣味について」「国の観光地」「国との違いについて」）について原稿を書き、その後で話す活動として口頭発表を行った。日本人ゲストにインタビューする活動も例年通り2度行った。

・書く練習

話す練習での原稿作成をワープロを用いて行なった。

・Pronunciation Practice

コースの最初にこれまでのように、発音システムを6回（45分×6回）にわたり導入・練習し、会話の時間に「Sound Practice」という発音練習用シートを使用し5分程度の発音練習を各課で行った。

・ホームビジットプログラム

ホームビジットプログラムも例年のように7月第2週目の土、日に実施した。教科書がほぼ終了し、国の観光地など様々な発表を経験したあとでもあり、日本語が実地にどの程度通用するかを体験するいい機会になっている。訪問した翌週には体験したことを各クラスで口頭で発表し、訪問家庭へのお礼状も書くことにしている。

(c) 「専門について話す」(第15週)

この授業では、学生、教師1対1の個別指導として、1名につき8時間超の指導の後、各留学生それぞれが持ち時間8分で専門領域について発表した。発表は207講義室で行った。

5. アンケート結果

昨年と同様に、修了アンケートの結果について報告する。結果は以下の2点である。

①プログラム満足度

②留学生自身による達成度とコース満足度

①プログラム満足度

「このコースのプログラムの内容に満足していますか」という質問に対して、「0 (not satisfied), 1, 2, 3 (satisfied)」の4段階で回答するものである。

表1の上段は、「3 (satisfied)」と回答した人数、下段は「2」の回答までを含めた回答人数を比率で示したものである。参考のため、54期(2004年4月期)、56

期(2006年4月期)についても示してある。

表1 58期の満足度 (%)

期	54	56	58
「3」の回答	76	100	80
「3」と「2」の回答	100		93

今期の学生の満足度も高いことがわかるが、1名のみ「まったく満足していない」という回答であった。コメントは特になかった。

②留学生自身による達成度とコース満足度

学生自身は自分の成果をどのように評価しているかを記す。質問は、「学習成果に満足していますか」というもので、回答はコースの満足度と同じく、「3」から「0」までの4段階評価である。

表2 58期の学生自身の満足度

期	54	56	58
「3」の回答	44	23	47
「3」と「2」の回答	66	77	93

「2」までの評価である「ほぼ満足」を含めると、これまでになく成果についてかなり満足しているといえるが、「3」のみの回答では昨年も同様で、成果について十分には納得していないことが伺われる。

6. まとめと問題点

期によってクラスの雰囲気は様々であるが、今期は積極的に日本語を使おうとする学生が少なかったような印象である。これまでの修了アンケートで度々指摘のあった話す練習が少ないという点は、新たに「Talking time」という時間を設けることで様子を見た。「Talking time」では、習った項目を用いて、決められたトピックで話しをするような授業であったので、修了アンケートでの評価はよかったが、もっと話す練習が必要とのコメントも見られた。内容についてさらなる検討が必要である。

もう1点は、研究留学生の制度に関して、修了期間について誤解のあった学生があり、日本語研修コースの期間中悩みを抱え、日本語に集中できない学生がいた。自分自身の将来構想に関わる事例であったため、数度の話し合いを行ったが説得できなかった。早め、早めの対応の必要性を強く感じた次第である。